

# 女子高校生にみる押し花体験とその意義

山本俊光<sup>1,2</sup>・森 啓一郎<sup>1</sup>・松尾英輔<sup>1,3</sup>

<sup>1</sup>園芸福祉研究会 841-0062 鳥栖市幸津町 984-1

<sup>2</sup>南筑高等学校 839-0851 久留米市御井町 1360-5

<sup>3</sup>東京農業大学農学部 243-0034 厚木市船子 1737

## Experience and Meaning of Pressed Flowers on High School Girls

Toshikou YAMAMOTO<sup>1,2</sup>, Keiichiro MORI<sup>1</sup> and Eisuke MATSUO<sup>1,3</sup>

<sup>1</sup>Japanese Society for the Study of Horticultural Well-Being, 984-1 Saitsu, Tosu-shi 841-0062, Japan

<sup>2</sup>Nanchiku High School, 1360-5 Mii, Kurume-shi 839-0851, Japan

<sup>3</sup>Faculty of Agriculture, Tokyo University of Agriculture, 1737 Funako, Atsugi-shi 243-0034, Japan

### Summary

This study investigated the contents and the experiences of pressing flowers made by the high school girls who participated in the pressed flowers contest using a questionnaire survey. Many high school girls made the pressed flowers with their own designs, so they could obtain a sense of achievement and had a personal impression on the pressed flowers. This experience deepened relations with plants and resulted in their interest in plants and gardening. For example, about the half of the students who hadn't been interested in flowers on a roadside had a good look at those flowers. Some students took care of plants positively.

**Key words :** pressed flowers, high school girls, relations with plants, gardening

押し花, 女子高校生, 植物とのかかわり, 園芸

### はじめに

小中学校での園芸体験によって、栽培に対する興味・関心が高まり、先生との会話が増えた（松尾, 2003）、成人学校での園芸で、栽培や収穫を体験し、食べる楽しみを知り気分転換になった（宮田ら, 2003）、オープンガーデンにかかわった住民は、花や緑に触れることが楽しい、情報交換や仲間のおしゃべりが楽しい（林・中瀬, 2003）など植物にかかわる体験によって栽培や植物そのものに関心が高まり、楽しさを感じる事が報告されている。

押し花は、植物を用いた制作活動の一つであり、生きた植物とのかかわりは少ないが、乾燥法の進歩によって、生育時の植物の持つ色を鮮やかに残すことができるようになり、さまざまな造形表現が可能になった（豊増ら, 2002）。しかも、生の植物が少なくなる冬場や思い立ったときに作品づくりをすることができる利点などから、植物に関心を持つきっかけになることが期待されている（松尾, 2005a）。

押し花関係者によると、経験者の押し花への関心が高くなると、庭や道端の草花を押し花に使えないかと

考えるようになったり、自分で栽培した植物を用いたりする傾向があるという。実際、押し花教室参加者は、庭や道端の草花を見ると押し花に使えるかどうかを考えるようになった、と板井（2005）は報告している。

いっぽう、平成15年の農業高校のカリキュラム改訂で新たに取り入れられた「生物活用」では、人と園芸とのかかわりを学び、その中で植物を活用した暮らしの手立ての一つとして押し花が取り上げられている（松尾, 2005b）。しかし、押し花を体験した高校生は、どの程度の体験で、どのようなことを学んだときに、どのような形で植物に関心を示すようになるのだろうか。

そこで、本研究では、高校生を対象にした2005年度全国押し花コンクールの参加者を対象にアンケート調査を行い、押し花体験の実態と体験後の生徒の変化を明らかにし、植物に対する興味・関心をいかに高めたか、植物とのかかわりをどのように深めたかを探った。

### 調査方法とまとめ方

2005年10月に行われた第2回全国高校生押し花コ

2006年7月22日受付、9月10日受理。

Table 1. How to make the pressed flowers (plural replies).  
第1表. 押し花の作品をどのようにしてつくったか (複数回答) (N=174).

項目	回答率 (%)
自分で考え、わからないところだけ先生に聞いた	47
自分の思いに合わせて、植物を切ったりばらばらにしたりして組合わせた	44
植物の色やもっている形を大切に作った	41
植物をたくさん使って、紙やペンなどの道具は、あまり使わなかった	39
作り方をいくつか教えてもらい、作った	22
紙やペン、染料などを使って、それにマッチするように植物を使った	20
作品例を見ながら作った	11

ンテストに参加を申し込んだ生徒 357 名にアンケート用紙をあらかじめ配布しておき、9月下旬の作品の提出時に返送してもらった。内容は、性別、学年、コンテスト応募回数、押し花の初体験の時期と場所、最初に指導した人、押し花を体験した回数、押し花に使った植物の採取方法、作品づくりの手順、押し花の好きなど、押し花を始めてからの行動の変化の 11 項目である。回答は選択方式で記入させ、感想は自由に記述させた。

自由記述の内容は、文面を構成する主たる語句をキーワードにして類似した内容を整理した。押し花体験後の行動の変化については、体験前すでに行っていた人数と体験後の人数から何%の人が変化したかを割り出し、変化した人数は有意差があるかどうかを $\chi^2$ 検定で統計分析した。

## 結果と考察

### 1. コンテストに出場した生徒の属性

アンケートの回答者は、男子生徒 21 名、女子生徒 174 名、不明 3 名の合計 198 名 (回答率 55%) であった。男性の回答者が約 10% と少なかったため、今回は女子生徒について取りまとめた。学年別にみると、1 年生 14 名 (8%)、2 年生 48 名 (28%)、3 年生 111 名 (64%)、不明 1 名で、3 年生が多かった。応募回数をみると、1 回目 133 名 (72%)、2 回目 39 名 (21%)、未記入 2 名であり、第 1 回 (2004 年) に続いて応募した生徒は少なかった。

初めて押し花を体験した時期をみると、高校時代 121 名 (70%) がもっとも多く、小学校時代 38 名 (22%)、中学校時代 10 名 (6%)、幼稚園時代 5 名 (3%) であった。多くの生徒は、押し花の経験が浅く、高校生になって初めて体験している。その体験の場所や機会は、授業 124 名 (71%) がもっとも多く、クラブ活動 28 名 (16%)、その他 18 名、未記入者 4 名であった。

初めて押し花を教えてくれた人をみると、教師 106 名 (61%) がもっとも多く、家族や親戚 33 名 (19%)、押し花の先生 31 名 (18%) であり、その他 1 名、未記入者 3 名であった。体験した回数をみると、2~3 回 120 名 (69%) がもっとも多く、5~10 回 31 名 (18%)、11 回以上 15 名 (9%)、未記入者 8 名であった。

以上のように、高校生になって初めて押し花を体験した生徒が多く、彼らの多くが授業で教師から習っていた。つまり、本調査の回答者は概して押し花に関しては経験が浅い、という事実を念頭において以下の結果を考察する必要がある。

### 2. 押し花の作品の制作にあたって

まず、押し花に使った植物の入手方法をみると、「自分で採ってきた」が 131 名 (71%) でもっとも多く、「他の人が採ってきた」は 91 名 (49%)、「自分で育てた植物を使った」は 36 名 (20%) であった (複数回答)。コンテストの募集が新学期に入って始まり、応募締め切りが 9 月下旬であったこと、今回初めてコンテストに挑戦した生徒が大半であったこと、コンテストまでに押し花の体験が少なかったことを考え合わせると、押し花のために植物を育てる時間的ゆとりは少なく、採集が主な入手方法になったと考えられる。

つぎに、押し花作品の作り方をみると、作品例を見ながら作った (11%)、作り方をいくつか教えてもらい作った (22%) ように作品例をもとに制作方法を会得していく手順をとったところ、つまり押し花教室などでみられる指導者が作品づくりのやり方を伝授するような方式をとったところは少なかった (第 1 表)。

これに対して、生徒の自主性に基づく制作がなされていることを示す回答が多かった。たとえば、自分で考えてわからないところだけ指導者に聞いた生徒 81 名 (47%)、自分の思うように植物を切ったりバラバラにしたりして、それらを組み合わせて作品を作った

Table 2. Impressions on the pressed flowers experiences (plural replies).

第2表. 押し花体験の感想 (複数回答) (N=141).

記述内容を示す主なキーワード	記述数	記述者数に対する割合 (%)
楽しかった	60	43
難しい・大変だった	40	28
よかった	19	13
嬉しかった	19	13
押し花の特徴は	18	13
これからも	15	11

生徒 77 名 (44%), 植物の本来の色や形を大切にしておいた生徒 72 名 (41%), 植物をたくさん使って紙やペンなどの道具はあまり使わなかった生徒 67 名 (39%) などが多かった (第1表)。

このような回答がでてくる背景には、押し花の指導にあたった指導者 (今回はおもに教師) の考え方が反映していると考えられる。そこで、コンテストに出場させた教師 (18 名) に押し花を導入した目的をきいたところ、生徒に自信を持たせる手段として (44%), 授業への興味づけに (39%) といった意見が多かった (山本ら, 未発表)。すなわち、教師は、生徒に自由な発想で、自分の思い通りに、植物の色や形を生かしながら、植物をたくさん使って制作させた様子が伺える。

筆者 (山本) が勤務する高校でもこのような意図で押し花を生物選択授業に取り入れている。生花を押すときには半信半疑の生徒たちも、花の色が鮮やかに残った押し花を開いてみたときには歓声をあげ、「きれい。」と口々にいいながら、思い思いの材料 (押し花植物) を選び、熱心に作品作りに取り組む姿がみられる。気に入った作品ができあがると、小躍りしながら友達のところに見せに行き、相手の作品を見ながらしばらくおしゃべりが続く。その満足感は、目の輝きやにこやかな顔つきにも表れている。間をおかずに感想を書かせると、まだまだ満足がいけないといった意見やもともと植物が好きだったがこの授業でさらに好きになったとも書かれていた。その後、授業に取り組む姿勢が意欲的になり、数か月後の校内の授業アンケートに多くの生徒が生物選択の授業は楽しいと感想を書いていた。

### 3. 押し花の好きなおところ

押し花は、生の植物を素材としてこれを押す、材料作りから始めて作品をつくるし、コンテストには個人参加とグループ参加があるので、生徒や指導者とのコミュニケーションが必要になる。これらの要素をもと

に押し花に関する事がらを 20 項目選定し、押し花の好きなおところはどこか回答させた (複数回答)。その内容は、①作品づくりに関する 12 項目 (うち 2 項目は②と共通)、②コミュニケーションに関する 5 項目 (うち 2 項目は①と共通)、③植物に関する 5 項目である。

①~③の内容でもっとも回答率が高かったのは、①作品づくりに関する項目で平均回答率 36%, つぎは②コミュニケーションに関する項目 28%, ③植物に関する項目 26% であった。20 項目のうち回答率ももっとも高かったのは、気に入った作品ができるとき (63%), 作品ができあがっていくところ (57%), 自分の好みの作品ができるところ (50%), 図案やアイデアを考えるとところ (46%), ものづくりができていくところ (43%) であった。また、作品に仕上げていく過程 (38%), 押し花にできる植物を見つけたとき (37%), 採取した植物を押して花の色や形がうまくできているかを見ること (37%) も高かった。植物を育てたり (10%), 育てた植物を押し花にしたりする (25%) は他の項目に比べ低かった。

作品を制作する中で、生徒は自分で考えて植物の色や形を配置して自分なりの作品を作っていた (第2表) が、その制作方法が生徒にとって好ましいものであったことがわかる。また、筆者 (山本) が押し花植物のでき具合を確かめるときは、これはうまくできただろうかとその都度わくわくどきどきする。生徒の回答で「押し花にできる植物を見つけたとき」や「押し花でうまくできているかを見る」などの割合が高かったことから、生徒は、単に作品をつくるということだけでなく、上記の筆者のような心持ちで素材である植物に対して関心を寄せていたと推察される。

作品に仕上げる過程で、仲間とおしゃべり (39%) をしながらコミュニケーションをとり、仲間と協力 (29%) し、仲間の作品を見て評価したり参考にしたりする (32%) という回答も多かった。作品をつくるという作業が仲間づくりに一役買っていることがわかる。

中高年の押し花教室では、参加者の 90% 以上が集中できた、気が散らなかった、夢中になっていたと回答している (板井, 2005)。ところが、生徒たちでは、静かな時間 (14%) や気持ちが集中する (17%) という回答は少なかった (第1図)。中高年の押し花教室の場合、必ずしも知り合い同士が参加しているわけではないので、押し花をしていたときの中高年の心理状態は没我状態にあったとみられる。これに対して高校生は、普段から顔見知りの人の中で作品を作ったことやグループで作品を作ったこともあり、集中して心を静かにして作品を作る状況にはなかったと推察される。それでも筆者 (山本) の観察では、そのとき制作に集中していたと思える生徒も多かった。したがっ

Table 3. Pleasant actions and those contents (plural replies).  
第3表. 楽しいと記述された主な内容 (複数回答) (N=42).

何が楽しいか	人数	主な内容	人数
		作品を	7
作る	17	好きなように	2
		意見を言い合いながら	2
		アイディアを	6
考える	12	自分で	3
		色合いを	2
見つける	5	自分で花を	5
協力する	3	お互いに	3
みる	3	押された花のでき具合を	2
喜ぶ	3	完成して	2
できる	3	いろいろな表現が	2

て、生徒はそのような集中した静かな時間をあまり好きと評価していなかったとみられる。

このように、高校生は、押し花体験をものづくりによる自己表現 (32%) の手段として高く評価しており、つぎに仲間とコミュニケーションがとれる媒介として、そして、植物とかわる媒体としてとらえている。

また、技術の向上の実感 (13%) や他人に教える喜び (11%) といった項目にも回答されていた。コンテストに参加した女子高校生は押し花の経験が少なく、指導者の側も生徒に自由な発想で制作させていた。そのような中でも、技術の向上や人に教える喜びという体験を実感した生徒がいたとみられる。

#### 4. 押し花を体験した生徒の心の様子

回答者のうち感想も記述した生徒は 141 名 (記述率 81%) であった。その主な内容と記述数を第 2 表に示した。なお、一人の生徒が一つから二つの内容を記述した場合が多く、一人当たりの記述数は 1.6 であった。

もっとも多かった語句は「楽しかった」で、それを記述した人の割合は 43% (60 名) であった。つぎに、難しい・大変だった 28% (40 名)、よかった 13% (19 名)、嬉しかった 13% (19 名)、押し花の特徴 13% (18 名) であった。押し花に対してよい感情に結びついたと考えられる記述、たとえば、楽しい、よかった、嬉しかった、感動した・達成感があった、押し花に感心した、面白かった、安らいだ・幸せなどは総記述数の 55% であった。

いっぽう、難しい・大変だったと回答した生徒の記述をみると、押し花を準備したが色あせていた、カビ

が生えた、家でしたらやり方がわからなかった、できあがった押し花は思った色とは違っていった、風で押し花が飛んでしまいそうだったなど技術や知識の未熟さからくる失敗や不安を述べていた。また、図案や表現に悩んだ、思う形になかなかならない、押し花の組み合わせ方がわからないなど、自分の発想の乏しさや表現力の未熟さから難しいと表現していた。難しいと表現していても、うまくできた、楽しかったなど、よい印象も付記していた生徒は 40 名中 17 名いた。

以上のことから、押し花の体験者のうち、困った点のみを記入していた 23 名、無関心 1 名、未記入者 33 名を合わせた 57 名を除いた少なくとも 117 名 (全体の 67%) の生徒は、押し花の体験を肯定的に評価していた。

つぎに、もっとも記述の多かった「楽しい」という語句について、どのような表現 (語句) とともに用いていたかを示したのが第 3 表である。

「楽しい」とだけ記述していたのは 60 名のうち 18 名であり、残りの 42 名は具体的な記述をしていた。

「楽しい」の前後に記述していた語句は、「作る」がもっとも多く 17 名であった。つぎに「考える」12 名、「見つける」5 名、「協力する」3 名であった。さらに詳細にみると、「作品を作る」7 名、「アイディアを考える」6 名、「自分で花を見つめる」5 名、「自分で考える」3 名、「お互いに協力する」3 名などの表現がみられた。

先に押し花の好きなところを選択させた (第 1 図) が、自由記述においてもこれらの項目と同様な記述があり、かつ生徒はそれらを楽しいと表現していた。作品に仕上げていく過程で、自分で考え、植物を探し、押し花で作品を作っていく能動的な行動に楽しさを感じていることが伺える。

押し花制作は、花を美しく押すという技術や、できた押し花を組み合わせて作品に仕上げていく過程で図案を考え工夫を施すという知的な作業をとらえる。この作業を難しいと感じても、うまく克服できて思うような作品ができると、難しさを乗り越えて作り上げた喜びは大きく、嬉しい、よかった、感動、達成感、楽しいという表現に結びついた (第 2 表)。制作した後まで大変・難しいとだけ記述していた生徒は全体のわずか 13% にすぎず、その他の多くの生徒は、押し花の体験を難しいけれども楽しいというように肯定的にとらえていた。

今回の押し花の制作では、教師の方針もあり、自由に作品を作らせたところが多かった。このために自分の考えを表現しながら満足のいく形で制作したことが達成感につながり、押し花の体験がよい印象につながったことが伺える。

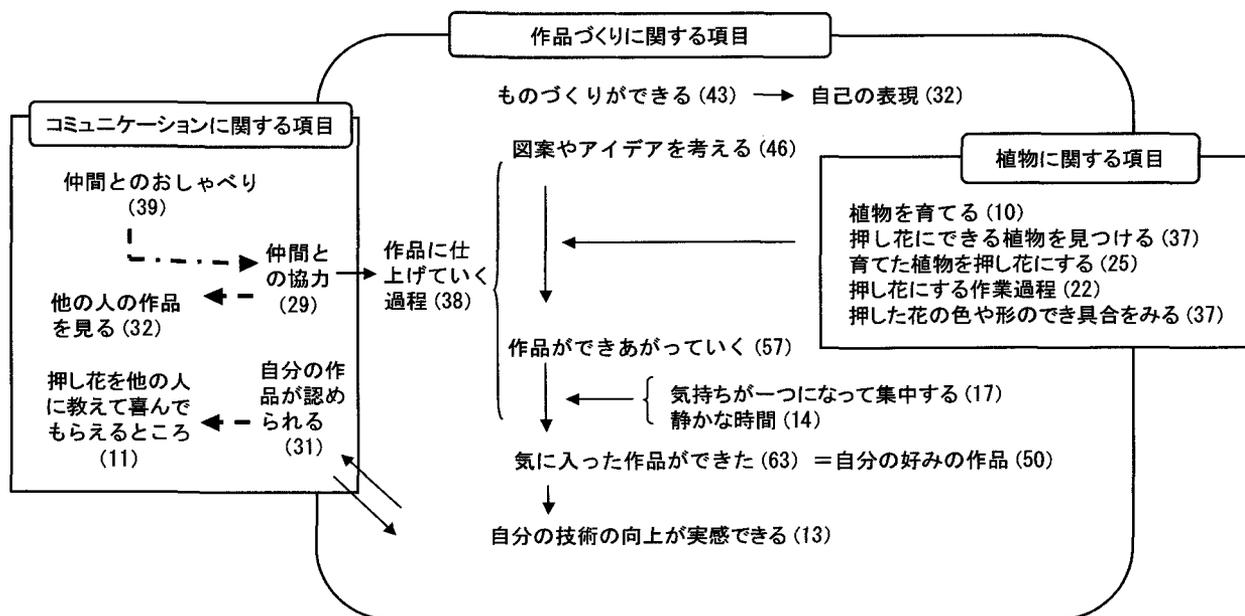


Fig. 1. Items liked by high school girls through the process of pressing flowers (plural replies) (%).  
第1図. 押し花の制作過程で女子高校生が好きな項目 (複数回答).

Table 4. Changed actions after the pressed flowers experiences (plural replies).  
第4表. 押し花体験後に行うようになった行動 (複数回答) (N=174).

行動	体験前の生徒数	(%)	体験後の生徒数	(%)	増加した生徒数	(%)	
道端や学校に咲く花をよく見た	109	(63)	148	(85)	39	(22)	** <sup>2</sup>
園芸作業を積極的にした	32	(18)	58	(33)	26	(15)	**
花瓶の水かえを自分からした	34	(20)	52	(30)	18	(10)	*
植物を自分で育てた	106	(61)	122	(70)	16	(9)	
花屋で切花を買った	63	(36)	75	(43)	12	(7)	
家族や祖父母などがする園芸を手伝った	48	(28)	60	(34)	12	(6)	
図鑑や植物の本などをよく見た	40	(23)	50	(29)	10	(6)	
花をプレゼントした	100	(58)	110	(63)	10	(5)	

<sup>2</sup>: \*\* 1%水準で有意差あり, \* 5%水準で有意差あり.

## 5. 押し花体験後の変化

押し花を体験して、意識や行動がどう変わったかをみるために、押し花を体験した後の行動で、押し花を体験する前にはなかった行動を8項目について調べた(第4表)。

表に示した8項目のうち1項目でも変化がみられた生徒は、全174名のうち97名(56%)であった。押し花を体験する前から行っていた行動は、「道端や学校に咲く花をよく見た」が109名(63%)でもっとも多く、「植物を自分で育てた」106名(61%)、「花をプレゼントした」100名(58%)の順であった。体験後を見ると、「道端や学校に咲く花をよく見た」は148名(85%)に増加し、増加した生徒数は39名

(22%)でもっとも多く、体験前にはよく見ていなかった65名の6割が変化していた。つぎは「園芸作業を積極的にした」58名で、26名(15%)が増加し、体験前に積極的に作業をしていなかった142名のうち18%が変化していた。「花瓶の水かえを自分からした」52名は18名(10%)の増加であった。以上の3項目については、経験後の人数はいずれも経験前と比べて有意な差があった。

生徒と植物とのかかわりの変化をみると、過半数の女子生徒は、体験前から植物を見たり育てたりプレゼントしたりしており、ある程度花や植物に関心があったとみられる。その生徒たちの多くは押し花を初めて体験し、花をよく見るようになったり、園芸作業を積

極的に行うようになっていたり、花瓶の水かえを自ら行うようになっていたりした。

また、すべての生徒は、すべてか一部分の植物をどこからか持ち寄っていた。ところが、押し花体験後には、半数を超える生徒が周辺環境に関心を示し、植物をいたわり、美しく咲かせることに積極的になるなど何らかの変化をみせていた。

これは、取り扱う素材が植物なので、生徒にとっては押された植物の色や形のでき具合をみるなど、制作の一連の作業過程で植物の持つ特性を目の当たりにする機会となる。そのような経験を経たことで、植物をよく見る生徒や栽培に積極的に取り組む生徒が高い割合で現れることになったと考えられる。

このように、なるべく生徒の自主性を尊重した押し花体験は、生徒に達成感と自信、意欲をもたせるだけでなく、植物とのかかわりを深めるきっかけづくりとなり、結果として植物への関心や園芸意欲を向上させる効果があることは明らかである。

## 謝 辞

本研究の遂行にあたり、アンケートにご協力いただきました回答者の生徒、先生方および㈱クリエイトに深謝の意を表します。

## 摘 要

押し花に関して、2005年第2回全国高校生押し花コンテストに参加した女子生徒174名のアンケートを取りまとめた。押し花を初めて体験したのは、高校生のときに授業で教師から初めて指導を受けたという生徒が多かった。調査時点で押し花を2~3回体験していた生徒がもっとも多かった。

制作にあたっては、自分で採ってきた植物を用い、自分で考えてわからないところだけを指導者に聞いて作品をつくる生徒が多かった。押し花の好きなところは、作品づくりに関する項目の回答率がもっとも高く、次いでコミュニケーションに関する項目、植物に

関する項目であった。全体の67%の生徒は、押し花の体験を肯定的に評価していた。自分の考えを表現しながら満足のいく形で作品を制作したことが達成感につながり、押し花の体験がよい印象につながったと考えられた。

体験前にはなかった行動が生徒の半数以上にみられるようになったが、そのなかでも「道端や学校に咲く花をよく見た」生徒がもっとも多く、園芸作業や花瓶の水かえを積極的にするようになった生徒も多かった。これらの結果から、押し花の経験が生徒に達成感と自信、意欲をもたせるだけでなく、植物とのかかわりを深め、植物への関心や園芸意欲を向上させる効果があることがわかった。

## 引用文献

- 林まゆみ・中瀬 勲. 2003. 近隣密集型のオープンガーデンにみられる人と植物とコミュニティの関係—神戸市神戸北町地区の事例から—. 人間・植物関係学会雑誌 1:23-28.
- 板井修一. 2005. 押し花教室における参加者の心理体験. 人間・植物関係学会雑誌 5(別):44-45.
- 松尾英輔. 2003. 農・園芸活動が果たす農芸教育的役割に関する研究. p.44. 九州大学大学院農学研究 院. 福岡.
- 松尾英輔. 2005a. 社会園芸学のすすめ. pp.83-91, 128, 213. 農山漁村文化協会. 東京.
- 松尾英輔. 2005b. 「生物活用」(園芸分野)を学ぶことの意義—その重要性和活用のあり方—. 自然と人間を結ぶ 農業教育 70 6:2-10.
- 宮田正信・木村正典・萩原信弘. 2003. 東京農業大学成人学校生徒の園芸教育および園芸活動に関する意識調査. 人間・植物関係学会雑誌 3(別):68-69.
- 豊増加代子・松尾英輔・崔 至鎔. 2002. 書籍を通してみた押し花の普及要因について. 人間・植物関係学会雑誌 2(別):42-43.